

3年生国語『AIは哲学できるか 批判的に読む～ものの見方・考え方を深める』

静岡大学教育学部附属島田中学校 国語科 辻元 智

【はじめに】

急激に進展する情報化社会において、溢れる情報の中から真偽を見極め、主体的に物事を判断する力の育成は喫緊の課題である。中学校国語科においても、単に文章の内容を読み解くだけでなく、与えられた情報を客観的かつ論理的に吟味し、自らの考えを形成・更新していく「批判的な読み（クリティカル・リーディング）」の育成が強く求められている。本単元『AIは哲学できるか』（中学3年・教育出版社）では、「批判的な読みを通して、学習者が自らのバイアス（先入観）に注意しながら情報の正誤や妥当性を区別し、自分の考えの更新や、考えの深まりを自覚すること」を「学びの実感」と定義し、この実感を獲得させる授業づくりに主軸を置いた。

具体的には、まず第1時において「批判的に読む」ということの意味を学習者と共に整理した。「批判」とは単に筆者の主張を否定することではなく、「正しい情報とそうでない情報を正しく区別した上で、意見を多面的・多角的にとらえ、自分の考えを更新したり、深めていったりすること」であり、同時に「どれほど客観的に読もうとしても、自分自身のバイアスはどうしてもかかってしまう」という自己相対化の視点を共有した。その上で、情報の信頼性を確かめるスキル（知識及び技能）と、文章に表れているものの見方や考え方を捉え直す力（思考力・判断力・表現力）の高まりを実感させることを目指した。

第3時～第5時の追究の場面では、本文の中で批判的に読むべき筆者の意見を生徒自ら選択し、個人追究・小集団追究・全体追究と段階を踏みながら読み深めていった。その際、インターネットや生成AIを情報収集および検証のパートナーとして活用することを認めることで、現代的な情報環境の中で多角的

に思考を深められるようにした。

このような追究のプロセスを経た上で、単元末の言語活動である「世の中の様々な事象について批判的にとらえ直す探究的な学習」へと繋げていく構成とした。本単元を通して学習者一人ひとりが、「批判的に読むことで考えが更新されたり、自分の考えがより深まったりした」という「学びの実感」を得ることを期待し、本実践に取り組んだ。

【授業実践報告】

（1）単元目標の確認および第1時

本単元では、情報の信頼性の確かめ方を理解して実践する力（知識及び技能）を養うとともに、文章を批判的に読みながらそこに表れているものの見方や考え方について深く考察する力（思考力・判断力・表現力）の育成を目指して実践した。導入として、指導者自身の「日常生活の中での失敗談を行い、一度立ち止まって多角的・多面的に考えることの大切さと難しさを感じてもらった。また、単元末には「世の中の様々な事象について批判的にとらえ直す」という探究的な言語活動を設定していることも伝え、残りの時間でその基盤づくりとして「批判的に読むとはどういうことか」を全体で検討した。その際、「批判的に読むとは単に否定することではなく、正しい情報とそうでない情報を正しく区別して自分の考えを深めていくこと」そして「どれほど意識しても自分自身のバイアスはどうしてもかかってしまうこと」の2点に着目させた上で文章の範読を行い、形式段落の番号付与や文末表現への着目を通して、事実と意見を区別して読み解く学習活動へと繋げた。

（2）「事実と意見を区別しながら、筆者の主張をつ

かも」

筆者がどのような意見を述べているか、前提となる事実と区別しながら読み取った上で、全員で「どこを批判的に読んでいくか」の検討を行った。その結果「①内発的哲学能力のないAIはそもそも哲学を行っているとは言えず、人間の次元には達していないのは本当か」「②人間の証とされてきた自由意志に基づく自律的活動や思考能力は本当にいずれAIに陥落させられるのか」「③AIが内発的哲学能力を得て人間と対話したとして、哲学の新次元は開かれるのか」という、筆者の主張と結びつきの強い3箇所を「批判的な読みをはたらかせて読むべき場所」として決定した。

しかし①については、大きく議論になったクラス(図1)と、筆者の意見に誰も異論を唱えないクラス(図2)に分かれた。あるクラスは1時間かけて議論し、あるクラスは第2時の枠の中でこの意見の吟味は終

え、第3時以降は2つ目と3つ目の意見を批判的に読むことにして終わった。

(3)「筆者の意見を批判的にとらえよう」①

「人間の証とされてきた自由意志に基づく自律的活動や思考能力は本当にいずれAIに陥落させられるのか」について、批判的な読みを意識してとらえ直す時間を設定した。魅力的だったのは、「人間の証は陥落させられる」という言葉の意味について吟味している学習者の姿があったことである。大半の学習者が陥落の意味を「AIが人間の上を行く」ととらえたが、一定数の学習者は、「AIにもできるようになるという意味であって人間が落ちぶれるという意味ではない」ととらえた(図3)。前者だとすれば陥落させられるにはかなりの進歩を要するし、後者だとすれば今後陥落していく可能性が高いのではないかという意見にまとまった。また、後者の定義だとしても今度はどこま

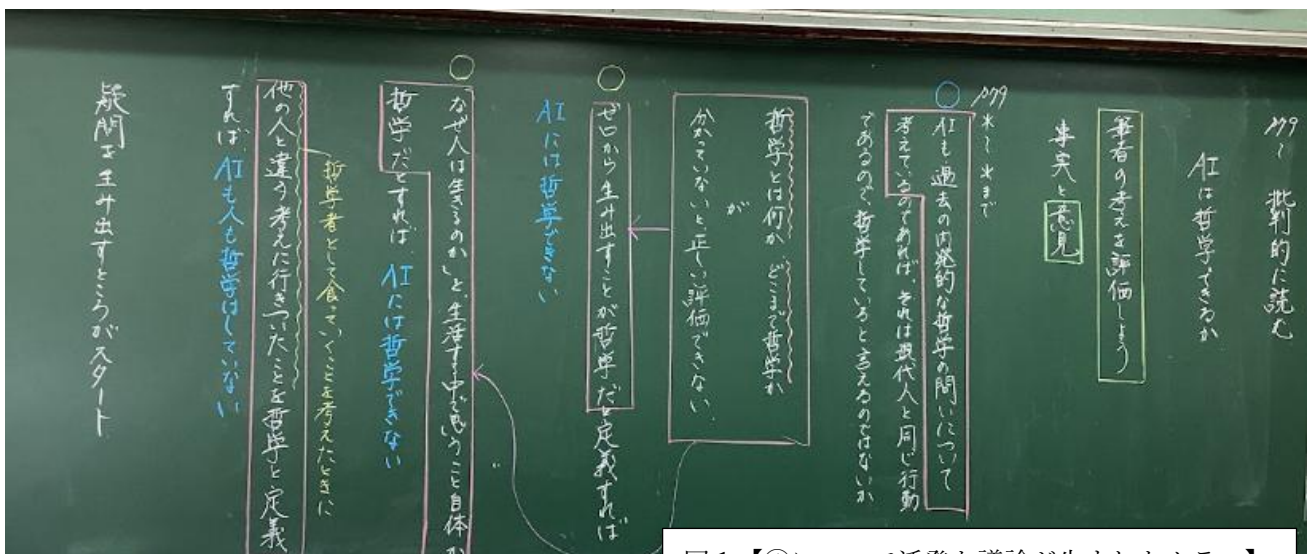


図1 【①について活発な議論が生まれたクラス】

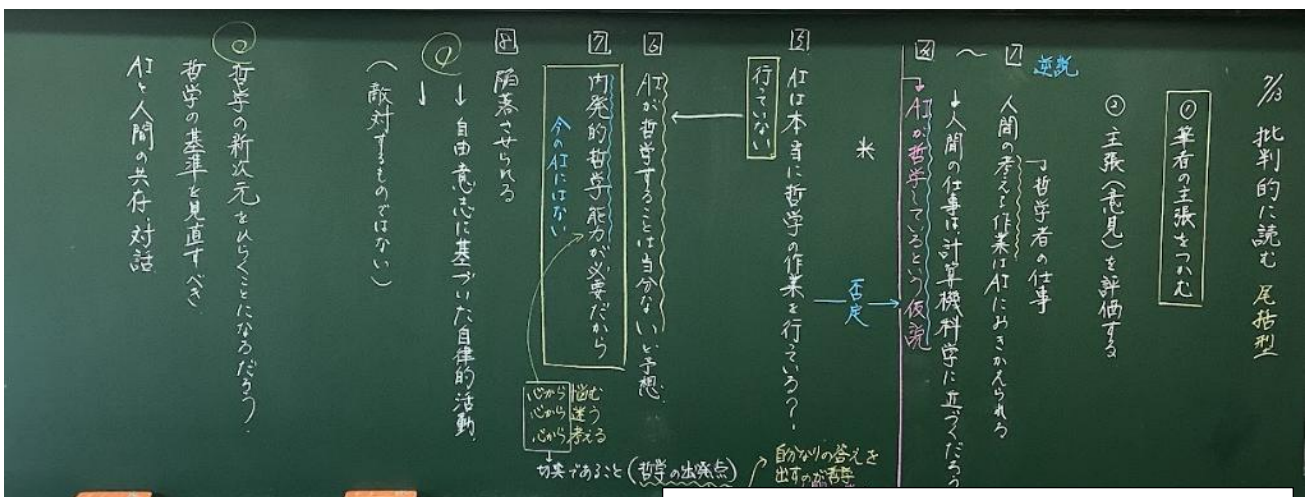


図2 【①の筆者の意見に異論を唱えないクラス】

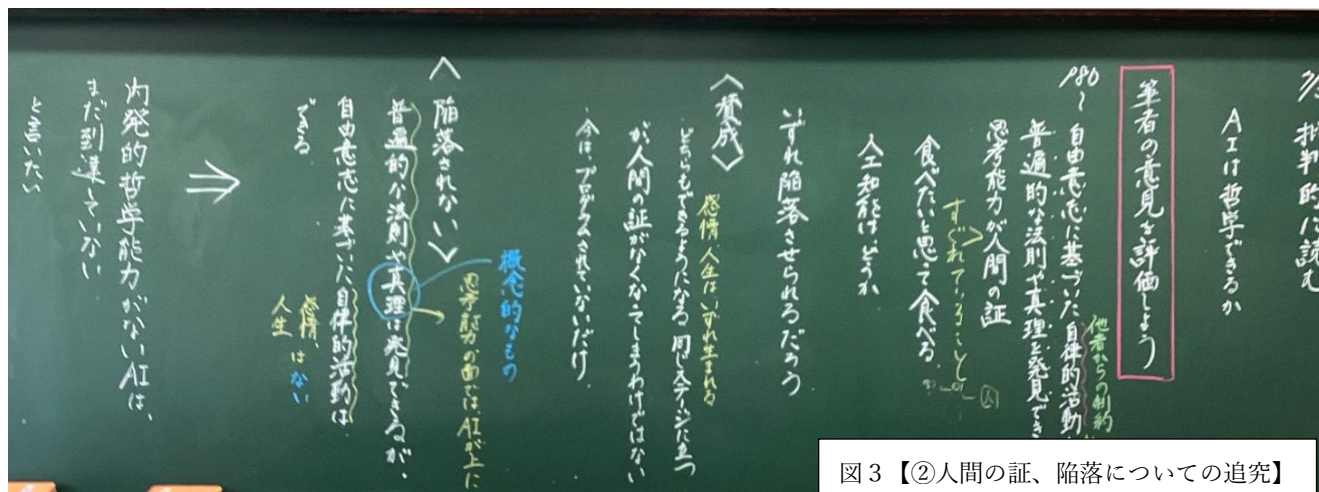


図3 【②人間の証、陥落についての追究】

でを「自由意志」とするかで議論になり、活発な議論となった。また、実際に AI に問いを投げてみ

ないという結論になる。そういった学習者への指導者のはたらきかけとして、「一つの考え方として

た学習者は「すでに普遍的な法則や真理を発見する思考能力は AI の方が上に立とうとしているのではないか」と述べた。しかし、AI はすでにある法則や真理を導く能力には長けているが、全く新しい法則や真理を導くことは苦手なはずだという反論があり、今はまだ自由意志に基づいた自律的活動も、普遍的な法則や真理を発見する思考能力も、AI は有していないだろうという結論にいたった。筆者の意見に賛同しつつも、陥落のとらえ方次第で意見が変わってくる学習者もあり、有意義な議論となった。

筋は通っているように感じるが、いずれ A I が内発的哲学能力を手に入れる」という前提は否定せずに考えた場合、新時代は開かれるのか考えてみようというアドバイスをした。

【(3)「人間の証とされてきた自由意志に基づく自律的活動や思考能力はいずれ AI に陥落させられるのか」の板書】

「A I が内発的哲学能力をもつということは、人間と同じレベルに達するということであって、そうなるといわば「人間対人間」の対話になるから、結局哲学に新次元を開くことはないと思う」「A I は人間とは違うところがたくさんあるよ。例えば体がないことや、死の概念が違うとか。だから、そういった A I と人間の哲学の対話は新次元を開くと私は思うよ。」など、筆者の意見に対する賛成および反対意見を論理的に語り合っている様子がうかがえた。

(4)「筆者の意見を批判的にとらえよう」②

最終段落の意見「③AI が内発的哲学能力を得て人間と対話したとして、哲学の新次元は開かれるのか」という意見の是非について議論した。(2)である程度議論はしたものの、それでも学習者の中には「そもそも AI は人間が作り出したものであり、人間のインプットなしに A I が切実に哲学の問いを発することはありえないと思う」という考えを提案した者もいた。筆者の定義に照らしたときに、そうすると AI は哲学を行えないわけで、人間と AI の間で哲学の新次元を開くことは起こりえ

生徒の振り返りには、「前提を否定すると、筆者のその後の意見は的外れなものになった。そういう見方も大切ですが、一度その前提を受け入れてから意見について吟味するという姿勢も大切だと思った。」「私は批判的に読むにあたって、どうしても否定することが先行してしまいがちでした。けれど、今日気が付きました。筆者の意見もなるほどなずけるところはある。でも、ある視点で見たらこっちの意見も確かにうなずける、というように、様々な意見を比較しながらそれぞれの良いところと課題点を正確に見極めることが批判読みだということです。」という意見や、「批判読みが

みなしっかりできれば、おおげさかもしれないけど戦争はかなり減るんじゃないかと思う。」などという意見もあったので、これを次の時間の冒頭に生徒に紹介し、皆深くうなずいていた。

(5)(探究的な学び)「ニュースや日々の出来事について批判的にとらえよう」

教科書の本文を使った学びによって批判的な読みについて理解ができたところで、その読み方を生活の中で生かそうという探究的な学びの時間を設定した。「自動運転技術はこれからも高めていくべきか」「口コミをどのくらい信用すべきか」「ワールドカップの出場枠は適切か」など、1人1人が違った切り口で学習者自身が問いを見出して批判的に読みを発揮していた。

【成果】

・人が誰しももっている偏った見方・考え方(バイアス)を理解した上で、情報を多面的・多角的にとらえてより正確に理解した上で判断するという学びを、教科書内だけではなく、身の回りにある様々な情報を取り上げて実践的に行うことで、「文章をより豊かに読む方法」を発見したり、「ものの見方・考え方」に変化があったりした学習者が多く見られた。これからの生活に直接結びつく授業展開となったと感じる。

・意見に対して批判的に筆者が「陥落」「自由意志」などの言葉に込めた思いを探りながら本校国語科が大切にしている「言葉の重要性の実感」にも迫ることができた。

【課題】

・前提となる根拠の正誤まで考え出した結果、筆者の意見を批判的に読む学習活動が成り立たなくなってしまうクラスがあった。「批判的に読む」にあたって、本来は意見だけでなく、意見の前提となる根拠が正しいかどうかの精査も大切なプロセスではあるので、単元構想に迷いが生じてしまった。実践してみて、本文においては「事実は正しいもの」と仮定した上で読み進めた方がよかつ

たように感じる。

・探究的な活動として、生徒一人一人がそれぞれ違う情報に対して批判的に読んで自分の意見をもったが、その後設定した小集団単位での交流は紹介程度にとどまってしまった班も見受けられた。これは、問いが各々のものにとどまっており、集団の問いになっていないことが原因であったと考える。「批判的に読む」という大元の方角性は同じであったので成立すると想定していたが、小集団活動時の生徒の学びはそこまで深まらなかった。自分でテーマを決められるという自由度はないかもしれないが、集団の問いが同じであるからこそ個人の問いに対する深まりは生まれると考え、指導者から一律に同じテーマを提示した方が、それぞれの批判的な読みが正確であったかの検証があいまいにならずに進められたと感じる。

【参考文献】

西田太郎『だから、子どもの問い』で読みの授業が進まない 明治図書 2026,239p

『教育科学国語教育徹底ビジュアル解剖』 明治図書 2026,128

文部科学省、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』、東洋館出版社、2017、185p